

戦前の日本におけるシュルレアリスム理論の受容についての一考察： *Manifeste du surréalisme* の日本語訳を中心に

大村 梓

The Reception of Surrealist Theory in the Prewar Japan focusing on the Japanese Translation of *Manifeste du surréalisme*

OMURA Azusa

Abstract

Through the Meiji, Taishō and the early Shōwa eras, Japanese poets developed their own poetry style under the influence of Modern French poetry. Japanese translations of André Breton's *Manifeste du surréalisme* (*Surrealist Manifesto*, 1924) and Louis Aragon's *Traité du Style* (*Treaties on Style*) were published in the fourth and fifth issues of *Shi to shiron* (*Poetry and Poetics*, 1928-1931) in 1929. Kitagawa Fuyuhiko translated only part of *Surrealist Manifesto* into Japanese for *Poetry and Poetics*. The complete translation of *Surrealist Manifesto* was published after the war, thus Japanese Surrealism developed without a clear definition or theory of Surrealism and the situation differentiated it from Surrealism in France. This paper compares the original French text with Japanese translations (by Kitagawa and Iwaya Kunio), focusing on the words *seikatsu* (lifestyle) and *kotoba* (word). Kitagawa chose *seikatsu* to translate 'la vie' instead of *jinsei* (life), and *kotoba* to 'le langage' instead of *gengo* (language). Given the selections, Kitagawa's translation presents Surrealism as a more useful idea for the time compared to the original text possessing universal messages.

キーワード：シュルレアリスム、翻訳、北川冬彦、アンドレ・ブルトン
key words: Surréalisme, Translation, Kitagawa Fuyuhiko, André Breton

はじめに

1868年の明治政府発足後の急激な社会の近代化（西洋化）の過程で、日本の詩人たちは新しい社会と生活を描く必要に迫られた。近代日本人が直面している現実を描くための文体や表現を獲得するには、西欧の詩の翻訳は必要不可欠であった。また文化的・歴史的背景の相違や日本の伝統的な短詩の形式の影響から、日本の近代詩はフランスの近代詩とは異なる発展を遂げたといえるだろう。詩誌『詩と詩論』（1928年～1931年）は、シュルレアリスムのみに焦点を当てたわけではないが、その理論を日本に紹介したという点から、日本でのシュルレアリスムの発展におい

て重要な存在である。『詩と詩論』にはエスプリ・ヌーボーや散文詩、シネポエムが紹介されており、瀧口修造（1903年～1979年）はルイ・アラゴン（1897年～1982年）の *Traité du style* （『文体論』）の日本語訳を第4冊（1929年6月）と第5冊（1929年9月）に発表している。さらにアンドレ・ブルトン（1896年～1966年）の *Manifeste du surréalisme* （『シュルレアリスム宣言』、1924年）の北川冬彦（1900年～1990年）による日本語訳も同じく第4冊と第5冊に掲載されている。そして第7冊と第8冊には原研吉による *Second Manifeste du surréalisme* （『シュルレアリスム第二宣言』）の日本語訳が発表されている。しかし北

川による『シュルレアリスム宣言』の翻訳は抄訳であったという点に着目すると、日本のシュルレアリスムの運動にはフランスで誕生した理論的な枠組みが不在のまま展開していったともいえる。¹⁾ここに日本のシュルレアリスムをめぐる逆説的な動きが存在する。つまり戦前にはシュルレアリスムの実践がより熱心に行われ、理論についての議論は戦後に巖谷國士(1943年～)等によってより盛んに行われた。この過程はモダニズムを巡る動きを連想させる。モダニズム文学は1920年代に花開き、戦前と戦後の文学をつなぐ重要な存在であるが、モダニズムという言葉自体の曖昧さがその全体像を理解するのを困難にしている。多くの優れた作品がこの時代に発表されたのは事実であるが、実際にモダニズムという言葉が何を指しているのかが非常にわかりにくい。同じことがシュルレアリスムにもいえるのではないだろうか。本論文では日本のシュルレアリスムを翻訳の観点から分析しようと試みる。

1 日本における翻訳詩の流れとシュルレアリスム

明治以降、近代社会を描く新しい文体を学ぶために、西欧の文学作品が日本語に精力的に翻訳された。西欧の詩を学ぶために重要な役割をなした翻訳詩集として、森鷗外と新声社の仲間たちによる『於面影』(1889年)、上田敏による『海潮音』(1905年)などがあげられる。翻訳者たちは自分たちの文体を作り出すという目的を持っていたため、翻訳詩集は西欧の文体やテーマを学ぶ教科書のような存在でもあった。堀口大學による翻訳詩集『月下の一群』(1925年)が登場するまでは、西欧の詩を純粋に読書として楽しむという段階まで日本語読者たちは達していたとはいえないだろう。堀口はベルギー人の継母との交流や外交官の父親について海外滞在を長くしたこともあって、西欧文化を実体験していた。堀口にとってのフランス語は書き言葉としてだけでなく、話し言葉としても存在していたといえるだろう。堀口は翻訳をとおしてギヨーム・アポリネールやシャルル・ボードレー、ジャン・コクトーやポール・エリュアール、フィリップ・スーポーをはじめとする多

くのフランスの詩人たちを紹介した。また仏作家ポール・モラン作『夜ひらく』の堀口による日本語訳はモダニズム文学グループである新感覚派の誕生に影響を与えたとされている。²⁾そして、シュルレアリスムがフランスから日本の文壇へとやってくる。

『月下の一群』が発表される前年にアンドレ・ブルトンの『シュルレアリスム宣言』は発表された。西脇順三郎(1894年～1982年)は日本のシュルレアリスムの発展において重要な人物の一人である。西脇はイギリスに滞在した後、1925年に帰国し、1926年4月に『三田文学』に発表した評論「プロファヌス」にて、イヴァン・ゴルとアンドレ・ブルトンを紹介した。³⁾シュルレアリスムの理論の翻訳も試みられた。1927年5月に『文芸耽美』誌上にて、上田保が「仏蘭西現代詩の傾向：ルイ・アラゴンに就て」を発表している。この批評には、ブルトンの‘*Entrée des médiums*’ (霊媒の登場)の抄訳が含まれており、シュルレアリスムの重要な概念、‘*l'état de rêve*’ (夢の状態)、‘*automatisme psychique*’ (精神的オートマティスム)も紹介されている。⁴⁾また上田保は『文芸耽美』(1927年7月号)誌上にて、ブルトンの‘*Poisson soluble*’ (「溶ける魚」、1924年)の抄訳を発表している。⁵⁾1928年3月に発表された瀧口修造による「シュルレアリスムの詩論に就て」からは、フロイトと夢の解釈、シュルレアリスムという言葉のそもそもの始まりについても理解していることがわかる。⁶⁾そして瀧口修造は「文体論」の翻訳を『衣裳の太陽』の1928年11月号に発表し、後に『詩と詩論』の第4冊、第5冊にも発表している。原研吉は『詩と詩論』の第4冊にて、シュルレアリスムを「オートマチスム」という言葉を用いて定義している。⁷⁾1930年には瀧口修造による『超現実主義と絵画』の日本語訳が刊行されている。⁸⁾このようにみていくと、『シュルレアリスム宣言』の全訳が存在しない状況であっても「夢」や「オートマティスム」といった概念、フランスでのシュルレアリスム誕生の背景について、日本での理解がある程度は進んでいたことがわかる。そして理解の足りない部分については、日本の文脈のなか

で補っていくことになったのではないだろうか。理論的な枠組みの全体が提示されない状況でも、詩人たちは実験的な作品を精力的に発表し続けた。その結果、それらの作品は「シュルレアリスム」という分類によって現在に至るまで呼ばれ続けることになるのであった。

2 『シュルレアリスム宣言』の日本語訳

北川冬彦は『詩と詩論』誌上に詩や翻訳を発表し、シネポエムや新散文詩運動に関心を持ち、1930年には『詩と詩論』を去ってしまう。北川はシュルレアリスムについて『詩と詩論』誌上で次のように述べている。

シュウルレアリストは、個性の中に、半意識の中に、そして無意識の中に、未踏の世界を発見した。深淵な個性の中に内的真を追求したのであった。その個性に対する絶対的信頼は、「夢」を「現実」よりもより真の経験であるとさへ考へるのである。⁹⁾

こちらは『シュルレアリスム宣言』の日本語訳が『詩と詩論』に発表される前に掲載されている。北川はシュルレアリスムの重要な概念である「夢」の存在を理解していたことがわかる。北川の『シュルレアリスム宣言』の日本語訳「超現実主義宣言書」は『詩と詩論』の第4冊・第5冊に1929年に掲載された。『詩と詩論』第4冊に掲載された広告によると、当初は「現代の芸術と批評叢書」として翻訳書の刊行を予定していたようである。¹⁰⁾ 第4冊にて、北川は *Manifeste du surréalisme* の冒頭の一部を日本語訳したものを発表した。第5冊では、『シュルレアリスム宣言』の後半の一部が訳されている。北川の文学活動を特徴づける新散文詩運動については、第3冊での「新散文詩への道—新しい詩と詩人—」にて北川によって説明がなされている。¹¹⁾ また戦後に北川は「私には、私の詩を、社会と私の心眼との一致点に結晶せしめようとする意欲がある。(後略)」¹²⁾と語っている。『シュルレアリスム宣言』は戦後に全訳が何回か刊行されている。稲田三吉訳(1961年)、生田

耕作訳(1970年)、巖谷國士訳(1974年、改訂版1992年)、森本和夫訳(1975年)、江原順訳(1983年)がある。1992年に岩波書店から出版された巖谷國士訳は2024年には第33刷が出ている。こちらが戦後に最も読まれている翻訳だといえるだろう。巖谷は戦後の日本にて、シュルレアリスムの発展に寄与した人物の一人として知られている。¹³⁾ 北川の翻訳テキストの分析を行う際に、巖谷の翻訳を参照しながら行う。それによって、『シュルレアリスム宣言』の戦前と現代での受容の変化についても考慮に入れることができると考える。

巖谷國士の『シュルレアリスム宣言』の翻訳は、1974年に出版された。瀧口修造が序文を書き、中西夏之と野中ユリによる作品が本翻訳書には含まれている。巖谷はそもそも「シュルレアリスム宣言」と「溶ける魚」は一つの本に収められるべきであったと指摘する。¹⁴⁾ ブルトンの意図を汲むのであれば、この二つの文章は同じ翻訳者によって同じ機会に翻訳出版されるべきであったといえるだろう。しかし戦前には『シュルレアリスム宣言』は北川冬彦によって翻訳され、「溶ける魚」は上田保によって翻訳が発表された。すでにこの段階から、日本的なシュルレアリスムの発展の始まりが予感されていたといえるのではないだろうか。1992年に岩波書店から出版された巖谷の日本語訳の改訂版からは、瀧口の序文も中西と野中の作品もなくなっている。巖谷は改訂訳へと「解説」を書いている。

いままも生き、鼓動しつづけているものに特有の、めざましい臨場感といったものがある。

すくなくともここには、通常の意味での<古典>あるいは<名声>につきものの、ある種の安定感—すでに功なり名とげ、<既知>のなかに安息しているという感じ—からはほど遠い、いまだこなれていない、片がついていない、ともすれば非充足の、宙吊りの感覚がつきまわっているように思える。むしろ無数の<未知>にむかってひらかれたまま、何かを待ちかまえてうずうずしている感じ、と

でもいったらよいだろうか。¹⁵⁾ (傍点は著者による。以下同。)

ここで巖谷が示しているのは、我々がいまだに『シュルレアリスム宣言』から学ぶことがあるということ、これを単に古典として認識することはできないということである。この観点からすると、『シュルレアリスム宣言』はより普遍的な価値観とメッセージを読者に届けているといえるだろう。それでは戦前の北川冬彦訳はどのような観点から翻訳されたのだろうか。北川の翻訳テキストのなかでもキーワードとなっている「生活」と「言葉」という単語に着目して分析を行ってきたい。

3 戦前のシュルレアリスム理論の翻訳をととした理解：「生活」

日本語において「生活」とは次のような意味を持つ。「生きていること。生存して活動すること。暮してゆくこと。暮し。」¹⁶⁾ これらが示すのは、「生活」が日常の活動に深く関係していることである。一方で、「人生」は次のように説明される。「人がこの世の中で生きること。人間の生存・生活。人間の生きている間、人の一生。」¹⁷⁾ 「人生」は「生活」よりも長い期間を表していることがわかる。それでは、*Manifeste du surréalisme* の冒頭をみていこう。

Tant va la croyance à la vie, à ce que la vie a de plus précaire, la vie réelle, s'entend, qu'à la fin cette croyance se perd....¹⁸⁾ (イタリックは著者による。以下同。)

諺にもとづいたこちらの冒頭の文章は、読者に対して '*la vie réelle*' (現実の人生・生活) に対する疑問を持つことを示し、関心を引くものである。それでは北川による日本語訳テキストをみてみよう。

生活に対する信用がすゝんで、結局生活は一時的のものに過ぎない、これが実生活であ

る、といふところまでくると、遂に生活に対する信用といふものは失はれて了ふ。(後略)¹⁹⁾

北川は '*la vie*' (人生・生活) を「生活」、そして '*la vie réelle*' を「実生活」と訳している。日本語読者にとっての「生活」や「実生活」は、近代化していく社会や文化のなかで自らの芸術的表現を作り出そうと努力している状況そのものを指すことになるだろう。²⁰⁾ 1974年の巖谷訳においても、北川と同様に '*la vie*' を「生活」、'*la vie réelle*' は「現実の生活」と「生活」を用いて訳されている。

生活への信頼、生活のなかのもっとも不安定な部分への、もちろん現実の生活への信頼が高じすぎると、結局、その信頼は失われることになる。(後略)²¹⁾

こちらの翻訳テキストでも、「生活」に対する不信任感示されている。後に、1992年の翻訳にて巖谷は訳文を少し手直ししている。

人生への、人生のなかでもいちばん不確実な部分への、つまり、いうまでもなく現実的生活なるものへの信頼がこうじてゆくと、最後には、その信頼は失われてしまう。(後略)²²⁾

1992年の訳文テキストでは、'*la vie*' は「人生」、そして '*la vie réelle*' は「現実的生活」と訳されている。それによって、「現実的生活」が「人生」の一部分を指しているとの印象を与えるだろう。²³⁾ 北川の翻訳は巖谷の1992年訳と比べると、人生全体というよりも、即時的な活動としてのシュルレアリスムを読者に印象づけているといえるだろう。「生活」は、北川の翻訳テキストの他の部分にも現れている。

(前略) もしも彼がまだ幾分でも聡明であつたとしても、彼はそのとき幼年期を顧ることが出来るばかりだ。それは養育者によつて台なしにされてゐるが大体として魅力に満ちてゐないこともないのである。そこに、常識的

な厳格さが無いといふことが、彼に同時に導かれるいくつかの生活に望みを残すのである。彼はこんな幻影の中に根を下す。彼はあらゆる物については、束の間の、極端な簡易しか識らうとはしない。(後略)²⁴⁾

比較のために原文テキストを以下に提示する。

... S'il garde quelque lucidité, il ne peut que se retourner alors vers son enfance qui, pour massacrée qu'elle ait été par le soin des dresseurs, ne lui en semble pas moins pleine de charmes. Là, l'absence de toute rigueur connue lui laisse la perspective de plusieurs vies menées à la fois; il s'enracine dans cette illusion; il ne veut plus connaître que la facilité momentanée, extrême, de toutes choses. ...²⁵⁾

北川は「plusieurs vies」(いくつかの人生・生活)を「いくつかの生活」と訳している。一方、巖谷は「いくつかの人生」(1974年)・「いくつかの人生」(1992年)と訳している。²⁶⁾ここでは幼年時代が言及されており、これから先の生き方について述べられている。北川訳はより具体的で実際の「生活」を指していることがわかる。

また「生活」という言葉を用いることによって、より効果的に訳されている箇所も存在する。こちらは原文テキストである。

...Je dis seulement que je ne fais pas état des moments nuls de ma vie, que de la part de tout homme il peut être indigne de cristalliser ceux qui lui paraissent tels. Cette description de chambre, permettez-moi de la passer, avec beaucoup d'autres. ...²⁷⁾

北川訳は次である。

(前略) 私はたゞ云ふ、私は私の生活のどんな瞬間をも尊敬しない、そして、人間のために、人間に斯々と見えたところのものを結晶

するといふことは価値がない。この部屋の叙述は、他の多くのものと一緒に黙過し去することを私に許して欲しい。²⁸⁾

北川は「ma vie」(私の人生・生活)を「私の生活」と訳している。こちらは原文でも人生のより現実的な瞬間について示しているわけであって、「生活」という単語が著者の意図を伝えるのには適しているといえるだろう。

北川は訳文テキストの最後に、再度「生活」という言葉を用いている。

作家は、それを一つの性格のせいとする、そして、与へられた性格は、主人公をして世界を遍歴せしめる。彼は行着いても、この主人公は、その行動とその反動とは驚くばかり予見されてゐるが、彼の目的であるところの計算を誤つてはならぬ義務がある。生活の波は、彼を持上げ、転がし、下げるやうに見えないでもない、彼はいつもこの「形づくられた」型の人間に属してゐる。(後略)²⁹⁾

こちらは原文である。

L'auteur s'en prend à un caractère, et, celui-ci étant donné, fait pérégriner son héros à travers le monde. Quoiqu'il arrive, ce héros, dont les actions et les réactions sont admirablement prévues, se doit de ne pas déjouer, tout en ayant l'air de les déjouer, les calculs dont il est l'objet. Les vagues de la vie peuvent paraître l'enlever, le rouler, le faire descendre, il relèvera toujours de ce type humain *formé*. ...³⁰⁾

北川が「Les vagues de la vie」(人生・生活の波)を「生活の波」と訳しているのに対して、巖谷は1974年訳、1992年訳の両方で「人生の波」と訳している。³¹⁾ 原文は長い人生という大きな流れのなかで抽象・具象に限らずいくつかの出来事が起こることを示唆しているが、北川の翻訳テキストはより実際のな何かが起こる可能性を示唆してい

るようだ。

このように、北川の翻訳で用いられる「生活」はより現実的で具体的な事象を表している印象を与える。一方で「人生」はより長い期間のなかで抽象的な事象をも含んでいるようだ。北川の翻訳テキストは翻訳をととした西欧の文学の受容の文脈で考えると、当時の読者にとっては理解しやすい翻訳であると考えられる。³²⁾ 西欧の文学から学び、実践を行い、自らの表現を作り上げるという素早い対応が必要とされる状況に彼らはいたからである。

4 戦前のシュルレアリスム理論の翻訳をととした理解：「言葉」

次に「言葉」という単語に着目して北川冬彦の翻訳テキストをみていきたい。北川は「langage」（言語）を訳出するのに「言葉」を用いている。北川は原文テキストの後半から数段落を翻訳したものを『詩と詩論』第5冊に発表している。こちらではシュルレアリスムと言語についての議論が行われている。北川の翻訳テキストをまずあげる。

言葉は人がそのシュルレアリスティックの使用をなすやうに与へられてゐた。彼は自らを了解せしめるに必要な程度に於て、やつとのもことで自らを表現すに至る、それによつて最も甚しい凡俗者流間に執られた機能の完成を確保するに至る。語り、手紙を書くことは彼には如何なる現実的困難をも提出しはしない、もしも、それをなしながら、平凡以上の目的を意図しないならばである。換言すれば誰れかと話をする（話をする愉快さのため）に止まるならばである。（後略）³³⁾

原文は以下である。

Le langage a été donné à l'homme pour qu'il en fasse un usage surréaliste. Dans la mesure où il lui est indispensable de se faire comprendre, il arrive tant bien que mal à s'exprimer et à assurer par là l'accomplissement de quelques fonctions

prises parmi les plus grossières. Parler, écrire une lettre n'offrent pour lui aucune difficulté réelle, pourvu que, ce faisant, il ne se propose pas un but au-dessus de la moyenne, c'est-à-dire pourvu qu'il se borne à s'entretenir (pour le plaisir de s'entretenir) avec quelqu'un. ...³⁴⁾

ここではシュルレアリスム的に言語を用いる方法についての議論が行われている。この文章の後に、「Les mots, les groupes de mots *qui se suivent* pratiquent entre eux la plus grande solidarité.³⁵⁾（*あ* *い* *う* *い* *で* *生* *ま* *れ* *て* *く* *る* *言* *葉* *た* *ち*、*言* *葉* *の* *む* *れ* *は*、*た* *が* *い* *同* *士*、*も* *っ* *と* *も* *大* *き* *な* *連* *帯* *を* *実* *現* *す* *る*。）³⁶⁾と述べられているが、シュルレアリスムにとっての言葉の関連性と詩的実験への方向性がここで示されているようだ。北川は「Le langage」（言語）を「言葉」と訳している。「言葉」は「人の発声する音声で意味を持ったもの。言語。言語を文字にあらわしたもの。言。表現。言いぶり。口ぶり。物語または小説の中で、地に対して、会話の部分。謡曲などの語り物で、音楽的な節をつけず、話をするように語る部分。言いぐさ。和歌。」³⁷⁾などと説明される。これらからわかるのは、「言葉」は具体的であり、文学作品とも関連づけて用いられているということだ。また北川は「Parler」（話す）を「語り」と翻訳している。そして「s'entretenir」（話し合う）を「話をする」と訳している。一方、巖谷は1974年の翻訳テキストにて、次のように訳している。

言語は超現実的な使用にあてられるよう人間に与えられているものだ。自分を理解させることが不可欠なかぎりにおいて、人間はなんとか自分の意思を表明することができ、その結果、もっとも卑俗なものの中から選んだ二、三の機能を、なんとかはたすことができるのである。話したり、手紙を書いたりするようなことは、そうしながら月並以上の目的を掲げるのでないかぎり、つまり誰かと語らう（語らう愉しみのために）だけで満足しているかぎり、決して人間に現実的な困難を

もたらしものではない。(後略)³⁸⁾

巖谷は ‘Le langage’ を「言語」と訳し、‘s’entretenir’ を「誰かと語らう」と訳している。「言語」は「人類特有の表現・受容行為の一。音声または文字によって思想・感情を表現し、伝達し、受容する行為。音声による音声言語と、文字による文字言語との区別があり、また、地域・社会によって異なることがある。ことば。げんぎょ。」³⁹⁾とされる。こちらはコミュニケーションにより主軸が置かれ、抽象的な概念も示しているが、文学作品への言及はみられない。1992年訳にて、巖谷は ‘Le langage’ を「言語」、‘s’entretenir’ を「だれかと語りあう」と訳している。⁴⁰⁾「言語」という単語を用いることによって、実際に使われている「言葉」に限定されない抽象的な概念をも含んでいると考えられるが、北川の翻訳テキストはより実践的な言葉の使用について述べている印象を与えるのではないだろうか。

また、北川は「語り」を他の訳文テキストでも用いている。

(前略) これほど役が語り、多く書くのを避けなければならないことはない。自ら聞き、自ら読むことは、隠れたすばらしい救いをぶら下げてゐるより外の効果はない。(後略)⁴¹⁾

原文は以下である。

... Il n'est rien sur quoi il devrait se refuser à parler, à écrire d'abondance. S'écouter, se lire n'ont d'autre effet que de suspendre l'occulte, l'admirable secours. ...⁴²⁾

北川は ‘parler’ (話す) を「語り」と訳している。一方で、巖谷は1974年・1992年訳とともに ‘parler’ を「話したり」と訳している。⁴³⁾「語り」を用いることによって、より詩的な印象が強まるのではないだろうか。

北川による「言葉」の使用は他の部分でもみられる。

留保なく僕がいつも価値あるものとしようとしてゐる言葉、それは僕に人生のあらゆる環境に適応するやうに見えるが、そののみならず、またこの言葉は僕から僕のどんな能力を奪ふこともないのみならず、その言葉は異常な明快さを僕に与へる、そしてこれはそれから殆んど期待しない範囲に於てゐる。僕はそれが僕に教へると思ふところまでゆく、そしてそれは、実際、僕には僕がその意味を忘れて了つた言葉の超現実的使用といふことにまでなる。(後略)⁴⁴⁾

北川はこちらにあげた引用にて、「言葉」を4回用いている。原文は以下である。

Non seulement ce langage sans réserves que je cherche à rendre toujours valable, qui me paraît s'adapter à toutes les circonstances de la vie, non seulement ce langage ne me prive d'aucun de mes moyens, mais encore il me prête une extraordinaire lucidité et cela dans le domaine où de lui j'en attendrais le moins. J'irai jusqu'à prétendre qu'il m'instruit et, en effet, il m'est arrivé d'employer surréellement des mots dont j'avais oublié le sens. ...⁴⁵⁾

ここでブルトンは ‘d’employer surréellement des mots’ (シュルレアリスム的に言葉を用いる) ことへの意欲を述べている。現在用いている言葉をシュルレアリスムの観点から再認識することによって、そこに新たな言語的価値を見出そうとしている。北川は ‘ce langage’ を「言葉」と訳し、‘d’employer surréellement des mots’ を「言葉の超現実主義的使用」と訳している。巖谷は1974年訳と1992年訳にて、‘ce langage’ を「言語」と訳している一方で、‘d’employer surréellement des mots’ を「言葉をたまたま超現実的に用いたりする」(1974年)・「言葉をシュルレアリスム的に用いる」(1992年)と訳している。⁴⁶⁾ 巖谷は原文でも用いられている単語の違い [langage と mots (単

語・言葉)」もあり、「言語」と「言葉」を使い分けて用いている。これまでの議論から考えてみると、「言語」自体には、実際に使われている言葉そのものだけでなく、コミュニケーション全般やより抽象的な概念も含んでいると考えられる。一方で、「言葉」は実際に物事を描写するための単語そのものを示しているのではないか。そういった意味で、ブルトンの原文テキストの方がより抽象的な概念を取り扱っており、北川の翻訳テキストはどちらかというと実際の事象を取り扱っていることがわかる。

おわりに

西欧の詩の翻訳の文脈のなかで『シュルレアリスム宣言』の原文テキスト、北川冬彦の翻訳テキストの比較分析を、「生活」と「言葉」という単語に焦点を当てて行った。その際に、巖谷國土の翻訳テキストを参考にした。北川は‘la vie’を訳すのに「生活」を用いたが、「人生」に比べてより現実的で具体的な事象を読者に印象づけるように作用したといえるだろう。原文テキストではより抽象的な概念で語られた内容が読み取れるが、翻訳をとおした西欧の詩の受容の文脈から北川の翻訳テキストを考察するのであれば、当時の日本語読者が求めるものを提示したといえるのではないだろうか。日本の詩人たちは西欧の詩の翻訳から近代化された社会を描くための文体とテーマを学び続けてきたが、そこには自分たちの直面している変化の激しい生活を描くための表現が必要である、という強い思いが反映されている。また北川は‘langage’を「言葉」と訳出している。「言葉」は実際に物事を描写するための単語そのものを示しているといえるだろう。ブルトンの原文テキストではシュルレアリスムと言語の関係性について、シュルレアリスム的な言語の実験的な使用への意欲や抽象的な概念が含まれているが、北川の翻訳テキストは実際に用いられている言葉そのものにより焦点が当てられているといえる。訳語の選択には、日本の詩人たちが新しい表現により望むものが反映されているといえるのではないだろうか。以上のように、明治・大正・昭和初期へ

と続く西欧の詩の翻訳の文脈から考えていくと、北川冬彦の『シュルレアリスム宣言』の日本語訳が発表された当時、シュルレアリスムに日本語読者が求めるものは普遍的な価値観というよりも、即時的な有用性であったのではないだろうか。

謝辞

本研究はJSPS科研費 JP22K00485 の助成を受けたものです。

注

引用に際して旧漢字は新漢字に改めた。

- 1) 戦後に『シュルレアリスム宣言』の全訳を刊行した稲田三吉は「(前略) 視覚に訴える絵画の紹介に比して、知性に訴える思想としてのシュールレアリスムの紹介が、つまりブルトンやアラゴンの主要作品の翻訳紹介が、今まであまりにもなされなすぎたと言ってもいいであろう。」と述べている[稲田三吉「解説」アンドレ・ブルトン (稲田三吉訳)『シュールレアリスム宣言：1924-1942』現代思潮社、1961年、134頁]。稲田によれば、これが日本で初めての全訳とされている(同書、138頁)。
- 2) 日本における翻訳の歴史と堀口大學の役割については拙著にて論じた。大村梓『異国情緒としての堀口大學：翻訳と詩歌に現れる異国性の行方』青弓社、2023年
- 3) 西脇順三郎「プロファヌス」『三田文学』第二期、第1巻第1号、1926年、109-124頁
- 4) 上田保「仏蘭西現代詩の傾向：ルイ・アラゴンに就て」、第2年第4号、1927年、20頁。本論文における『文芸耽美』からの引用は鶴岡善久編集、和田博文監修『コレクション 都市モダニズム詩誌 第3巻シュールレアリスム』ゆみに書房、2009年に所収されている復刻版から行う。André Breton, ‘Entrée des médiums’, *Œuvres complètes*, t. I, édition établie par Marguerite Bonnet avec, pour ce volume, la collaboration de Philippe Bernier, Étienne-Alain Hubert et José Pierre (Paris: Gallimard, 1988), p.274. 1922年11月に発行された *Littérature*, no.6に掲載された。
- 5) André Breton (上田保訳)「POISSON SOLUBLE (溶解すべき魚)」『文芸耽美』、第2年7月号、1927年、12-13頁
- 6) 瀧口修造「シュルレアリスムの詩論に就て」『創作月刊』、1巻2号、1928年、73-77頁
- 7) 原研吉「世界現代詩人レヴィユ アンドレ・ブルトン」『詩と詩論』、第四冊、1929年、211頁。本論文では『詩

- と詩論』の引用は全て、教育出版センターから1979年に出版された復刻版から行う。
- 8) シュルレアリスムの日本での年譜については次に詳しい。和田博文「解題・年譜・参考文献」、和田博文監修・編集『コレクション・日本シュルレアリスム＜1＞シュルレアリスムの詩と批評』本の友社、2000年、603-651頁
 - 9) 北川冬彦「詩（ポエジイ）の進化」『詩と詩論』、第3冊、1929年、172頁
 - 10) 広告欄『詩と詩論』、第4冊、1929年。
 - 11) 北川冬彦「新散文詩への道—新しい詩と詩人—」『詩と詩論』、第3冊、1929年、257-260頁
 - 12) 北川冬彦『夜陰：詩集』天平出版部、1948年、188頁。また鶴岡善久は「北川氏はつねに現実を重視し、その現実を社会のなかで総合的にとらえようとした。」と述べている（鶴岡『シュルレアリスム、その外へ』沖積舎、2015年、162頁）。
 - 13) 巖谷は『シュルレアリスムとは何か：超現実的講義』（メタログ、1996年）など、シュルレアリスムに関するさまざまな著書を発表している。
 - 14) 巖谷國士「後記—五十年後に—」、アンドレ・ブルトン（巖谷國士訳）『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』学芸書林、1974年、239-240頁。また瀧口修造も「一冊の書物は」というタイトルで序文を書き送っている（瀧口修造「一冊の書物は」、同書、5-7頁）。
 - 15) 巖谷國士「解説」、アンドレ・ブルトン（巖谷國士訳）『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』岩波書店、1992年、268頁
 - 16) 山田俊雄、築島裕、小林芳規、白藤禮幸編『新潮国語辞典—現代語・古語—第二版』新潮社、1995年、1146頁
 - 17) 同書、1093頁
 - 18) André Breton, *Manifeste du surréalisme: poisson soluble* (Paris: Éditions du Sagittaire, 1924), p.7.
 - 19) アンドレ・ブルトン（北川冬彦訳）「超現実主義宣言書」『詩と詩論』、第4冊、1929年、23頁。
 - 20) 新感覚派が活躍した文芸誌として有名な『文芸時代』（1924年～1927年）でも、創刊号（1924年10月号）にて「新しき生活と新しき文芸—創刊の辞に代へて—」というテーマで同人たちが文章を寄せている。川端康成は「我々は先づ我々自身の生活と芸術とに局面打開を招来するため、この雑誌に集つたのである」（川端康成「創刊の辞」[新しき生活と新しき文芸—創刊の辞に代へて—]『文芸時代』、第1巻第1号、1924年、7頁。『文芸時代』復刻版、日本近代文学館、1967年から引用。）と述べている。自分たちが直面している生活を描く言葉が何よりも重要であったことがわかる。
 - 21) 前掲、ブルトン（巖谷訳）『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』、1974年、13頁。
 - 22) 前掲、ブルトン（巖谷訳）『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』、1992年、7頁
 - 23) 訳語の選定において、より現実に関係している「la vie réelle」と宣言の後半に出てくる「真の人生」とを区別する意図があったと考えられる（巖谷國士、「注」、前掲、ブルトン（巖谷訳）『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』、1992年、215頁）。
 - 24) 前掲、ブルトン（北川訳）「超現実主義宣言書」、1929年、23-24頁
 - 25) Breton, *Manifeste du surréalisme: poisson soluble, op. cit.*, pp.7-8.
 - 26) 前掲、ブルトン（巖谷訳）『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』、1974年、13頁、前掲、ブルトン（巖谷訳）『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』、1992年、8頁
 - 27) Breton, *Manifeste du surréalisme: poisson soluble, op. cit.*, p.14.
 - 28) 前掲、ブルトン（北川訳）「超現実主義宣言書」1929年、28頁
 - 29) 同論考、28頁
 - 30) Breton, *Manifeste du surréalisme: poisson soluble, op. cit.*, p.15.
 - 31) 前掲、ブルトン（巖谷訳）『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』、1974年、21頁、前掲、ブルトン（巖谷訳）『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』、1992年、16頁
 - 32) また北川が「夢」についての議論を翻訳する箇所として選択していないことも（前述したように、北川は論考では「夢」について述べている）、指摘しておきたい。上田敏雄が起草した日本でのシュルレアリスムの宣言書である「A NOTE DECEMBER 1927」においても、「夢」や「オートマティスム」等に関する言及はない（北園克衛「『薔薇魔術学説』の回想」、復刻版『薔薇魔術学説』西澤書店、1977年、3頁）。John Soltもこの宣言書でのシュルレアリスムに重要な概念の不在について指摘している [Solt, *Shredding the Tapestry of Meaning: The Poetry and Poetics of Kitasono Katue, (1902–1978)* (Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 1999), p.55.]。
 - 33) アンドレ・ブルトン（北川冬彦訳）「超現実主義宣言書 (II)」『詩と詩論』、第5冊、1929年、66頁
 - 34) Breton, *Manifeste du surréalisme: poisson soluble, op. cit.*, p.52.
 - 35) *Ibid.*, p.53.
 - 36) 前掲、ブルトン（巖谷訳）「シュルレアリスム宣言・溶ける魚」、1992年、60頁
 - 37) 前掲、『新潮国語辞典—現代語・古語—第二版』、792頁
 - 38) 前掲、ブルトン（巖谷訳）「シュルレアリスム宣言・溶ける魚」、1974年、62頁
 - 39) 前掲、『新潮国語辞典—現代語・古語—第二版』、

683頁

- 40) 前掲、ブルトン（巖谷訳）「シュルレアリスム宣言・溶ける魚」、1992年、59頁
- 41) 前掲、ブルトン（北川訳）「超現実主義宣言書（II）」、1929年、66-67頁
- 42) Breton, *Manifeste du surréalisme: poisson soluble, op. cit.*, p.53.
- 43) 前掲、ブルトン（巖谷訳）「シュルレアリスム宣言・溶ける魚」、1974年、63頁、前掲、ブルトン（巖谷訳）「シュルレアリスム宣言・溶ける魚」、1992年、60頁
- 44) 前掲、ブルトン（北川訳）「超現実主義宣言書（II）」、1929年、67頁
- 45) Breton, *Manifeste du surréalisme: poisson soluble, op. cit.*, p.54.
- 46) 前掲、ブルトン（巖谷訳）「シュルレアリスム宣言・溶ける魚」、1974年、64頁、前掲、ブルトン（巖谷訳）「シュルレアリスム宣言・溶ける魚」、1992年、60頁